

- 西園昌久 1972 自己同一性障害の諸相 教育と医学, 20巻1号, 慶応通信
- 小此木啓吾 1972 自我と社会の出会い 日本教文社
- 小此木啓吾 1975 精神医学事典 加藤・保崎・笠原・小此木編 弘文堂
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 鑪幹八郎・山本 力・小柳晴生・磯部修一・小早川久美子・武則裕子・宮下一博・七浦久子 1979 自我同一性に関する研究(1)-(2) 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 206-207.
- 鑪幹八郎 1972 日本におけるアイデンティティと教育——『見る』と『見られる』について 教育と医学, 20巻1号, 慶応通信

であり、笠原（1980）が言う一貫した時間軸を持ちにくいのではないだろうかと言えよう。また大学生は自分の位置づけや方向を摸索するモラトリアムの時間を長く持つことが可能である。このような理由で大学生の場合は自我同一性を形成するのに時間を要し、専門学校生より自我同一性の達成度が低いものと考えられる。

さて、問題③の4年制大学生の専攻学科の間で差を示すかどうかを検討してみよう。4年制女子大生の混乱度得点において、専攻学科間に有意差が認められている。つまり、食物と理科専攻の学生は国文や英文科専攻の学生より同一性混乱度が低く、この傾向は4年次において著しい。それは、自分が専攻している学科内容と将来の仕事とを具体的に結びつけて考えやすいか否かに大きく関わっているものと言えよう。

最後に本研究では、被験者の選択抽出において大学、短大、専門学校をそれぞれ1校しか対象にしていない。さらにより一般的傾向をとらえるためには、今後、複数の学校を対象にしたデータを検討する必要があるだろう。

引用文献

- 遠藤辰雄・安藤延男・峰松 修・冷川昭子・井上祥治 1975 Ego-Identityの研究（1）；測定法（その1） 日本心理学会第35回大会発表論文集，394頁
- 遠藤辰雄・安藤延男・浜田哲郎・峰松 修・井上祥治・冷川昭子・長尾 博 1977 Ego-Identityの研究（8） 日本心理学会第41回大会発表論文集，884-885.
- 遠藤辰雄（編） 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle. Psychological Issues*, No1. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル——誠信書房)
- 福島 章 1974 現代人の攻撃性 至文堂
- 福島 章 1981 青年期のカルテ——受験世代の心理と病理 新曜社
- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性の形成と親子関係 依田 新（編）現代青年の人格形成 第4章 金子書房
- 笠原 嘉 1980 不安の病理 日本放送出版会
- 加藤 厚 1989 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究，60，184-187.
- Marcia, J.E. 1970 Ego identity status in college women. *Journal of Personality*, 38, 249-263.

本研究で用いた自我同一性達成度得点と自我同一性混乱度得点との間には密接な負の関係にあることが示された (Table 2)。達成度得点が高くなるにつれて混乱度は低下していく関係にある。従って、2つの測定値は自我同一性対同一性拡散の両極を示していると言えよう。

そこでまず、問題①の1年から4年までの発達的变化から考察してみよう。自我同一性達成度得点は3、4年次へと進むにつれて上昇していき、4年次でピークになっている。一方、同一性混乱度得点は国文科と英文科を除けば、3年、4年へと進むにつれて下降している。達成度得点および混乱度得点のいずれにおいても、1年次から2年次への変化は小さく、2年次から3年次へかけて変化が現れ、3年次から4年次へかけて変化が著しくなってくる。このような発達的变化を鑑ら (1979) の自我同一性形成段階のモデルに則して考察すれば、1年次は自分らしさを発見しようと摸索している「モラトリウム期」、2年次は「選択と喪失に伴う危機期」、3、4年次が「自我同一性定着期」に相当しているととらえられる。自分にとって何が大切か、何を意義ある仕事として選ぶか、どういう自分が本当の自分なのか、自分とは何なのかという人生を生きる基本的な構えと方向性が大体定まってくるのは、専攻分野が専門的に深まって行く3年次頃から始まり、卒論等に取り組む4年次にかけてさらに促進されていくものと考えられる。

なお、加藤 (1989) はEriksonの指摘した同一性の発達を、大学1年、3年、そして4年生を対象に質問紙調査法で縦断的 (1年間にわたって) に検討している。その結果は、(a) 1 - 2年次には、同一性の変動は認められない、(b) 3年次から4年次前期にかけて、同一性体験を優位に持つ者の増加が認められる、ことを示している。質問項目も測定方法 (横断的と縦断的研究) も異なるにもかかわらず、本研究と加藤の研究は大学生における同一性の発達において類似した結果を示していると言えよう。

次に、問題②の4年制大学、短大、専門学校生との比較に移る。大学1、2年生の達成度得点と混乱度得点では、4年制大学生と短大生との間に差は認められていない。しかしながら、専門学校生は女子大生や短大生よりも同一性混乱度が低く、同一性達成度が高い。このことは、福島 (1981) の研究においても同様な傾向を示している。つまり福島 (1981) は平均的な女子大生群とすでに病院実習などを経験している看護短大生群の同一性形成の程度を比較し、①看護短大生群が女子大生群よりも同一性の成熟度、役割期待、目標指向、対人関係、主体性の意識などの得点において高く、また②女子大生は同一性が不確実で、同一性拡散の状態にある者の比率が高いことが示されている。

大学生の場合には、専門学校生に比較して卒業後の自分の具体的進路が未知

食物専攻生より有意に自我同一性混乱度得点が高いことが認められた ($q(4, 392) = 4.24, P < .025$)。

⑥ 4年制大、短大、および専門学校生1、2年間の比較：4年制大学は英文と食物専攻の1、2年生を、短大は英文と家政専攻生を、専門学校は1、2年生を代表とした。分散分析(5群×2学年)の結果、専攻(群)間に有意差は認められなかったが、学年間に有意差に近い傾向が認められた($F(1, 364) = 2.82, .10 > P > .05$)。つまり、1年から2年へと上るにつれて、自我同一性混乱度が減少していく傾向があると言える。

⑦ 4年制大学と専門学校との比較：4年制大学は食物専攻の1、2、3年生を代表とした。群(2)×学年(3)の分散分析の結果、専攻間に有意差が認められた($F(1, 175) = 8.13, P < .01$)が、学年間には有意差は認められず($F(2, 175) = 1.87, n.s.$)、交互作用も有意でなかった($F(2, 175) < 1$)。専門学校生は、4年制大学より自我同一性混乱度が低いと言える。

(3)自我同一性達成度と自我同一性混乱度との相関 Table 2 に示す通り、相

Table 2
自我同一性達成度得点と自我同一性
混乱度得点との相関値

| 福岡女子大学 | | | | | 福岡女学院短期大学 | | |
|--------|----------|------|------|------|--------------|------|------|
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 1年 | 2年 | |
| 英文 | －.67 | －.44 | －.76 | －.67 | 英文 | －.51 | －.77 |
| 国文 | －.73 | －.77 | －.70 | －.50 | 家政 | －.79 | －.73 |
| 理科 | (全体)－.51 | | | | 久留米大学医学部付属臨床 | | |
| 食物 | (全体)－.69 | | | | 1年 | 2年 | 3年 |
| | | | | | －.37 | －.35 | －.51 |

関値は専門学校生で-.37と-.35という比較的に低い値を示していることを除けば、全体的には、-.51～-.79で高い値を示している。著しい負の相関関係にあることが認められる。従って、同一性達成度得点が高くなれば同一性混乱度得点は逆に低くなる関係にあると言えよう。

考 察

本研究の問題は、女子大生の自我同一性の形成が、①大学1年から4年までどのように発達していくのか、②4年制大学、短大、専門学校生との間に違いを示すのかどうか、③学部・学科の専攻学科間で違いがあるのかどうか、を横断的に質問紙調査法で検証することであった。

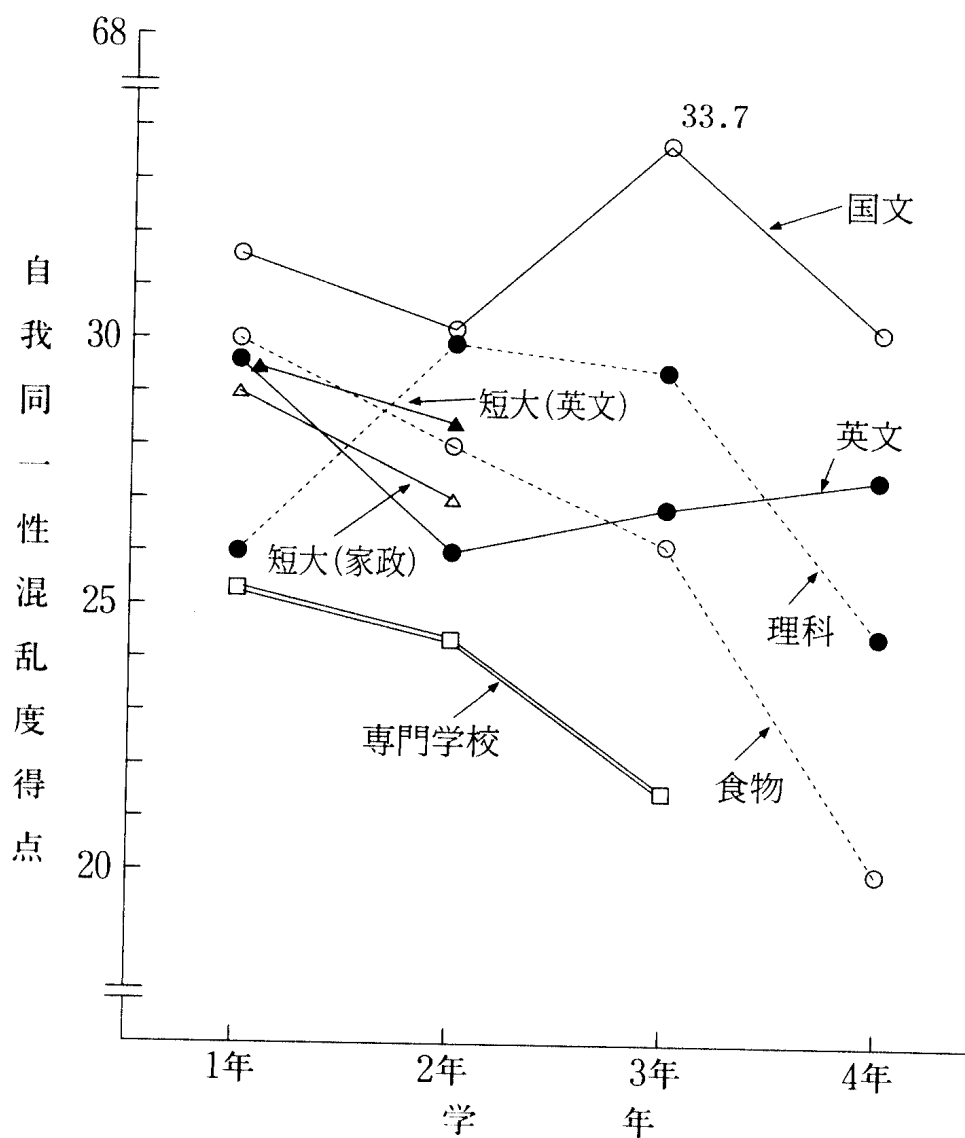


Fig. 2 女子大生，短大生，および専門学校生の自我同一性混乱度得点

④ 4年制大学のみ分析：専攻（4）×学年（4）の分散分析の結果，専攻学科間に有意差が認められ（ $F(3, 392) = 3.26, P < .025$ ），また学年間に有意差に近い傾向が認められた（ $F(3, 392) = 2.36, .10 > P > .05$ ）が，交互作用に有意性はなかった。専攻間の対比較をしてみると（Tukeyの検定），国文専攻生は

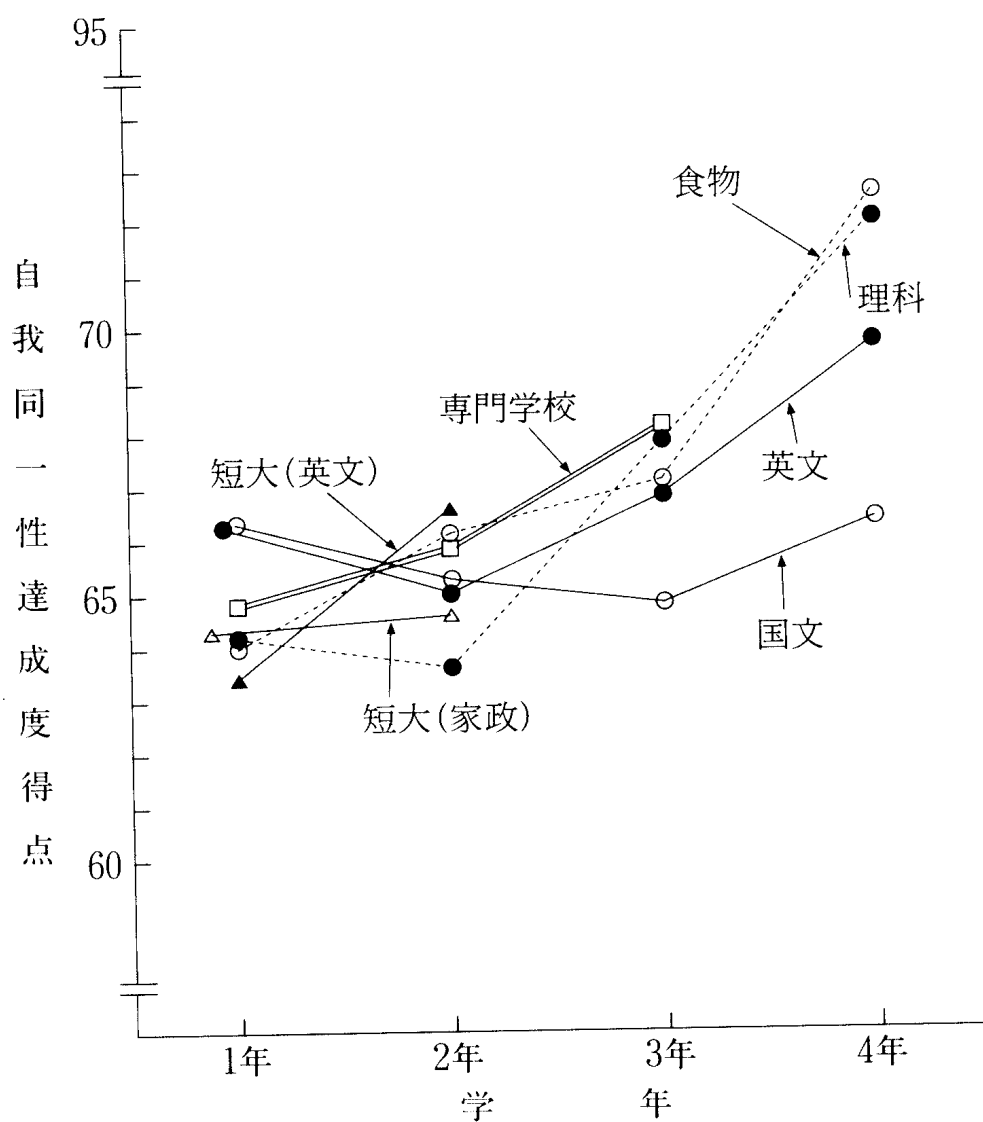


Fig. 1 女子大生，短大生，および専門学校生の自我同一性達成度得点

(1, 175) < 1)。学年間に有意差が見い出されたことから，1年，2年，3年と学年が上昇するにつれて自我同一性達成度が上がっていると言える。

(2)自我同一性混乱度得点 混乱度得点について各群の平均得点をFig. 2 に示す。

せる。各項目は1点～5点を含み、総得点は最低19点から最高95点の得点範囲になる。(2)自我同一性混乱度測定項目(砂田, 1979, 教育心理学研究, 27巻, P. 216)。これはEriksonの同一性拡散の病理としての部分症候にもとづき, ①時間的展望混乱, ②自意識過剰, ③役割固着, ④労働麻痺, ⑤同一性混乱, ⑥両性的混乱, ⑦権威混乱, ⑧価値混乱, の8つの下位概念で計34項目から構成されている。各項目は, 「はい」, 「いいえ」, 「どちらでもない」の選択肢からなる。各項目について, 「はい」に2点, 「いいえ」に0点, 「どちらでもない」に1点を与える。総得点の範囲は, 最低0点から最高68点になる。

以上の2つの測定尺度に対して「自分の考え方と生き方に照らして答えて下さい」と教示した。調査時期は, 1981年7月1日～10日の期間に実施された。調査は, それぞれの学校で講義の時間の終りの30分間になされた。

結 果

結果はそれぞれの大学, 学年, 専攻別に集計された。まず自我同一性達成度得点から分析する。

(1)自我同一性達成度得点 大学, 専攻, 学年別の各群の平均得点を示したものが, Fig. 1である。以下, ④4年制女子大生のみの分析, ⑤4年制, 短大, 専門学校間の比較, ⑥4年制と専門学校間の比較, の順に分析する。

④4年制女子大生のみの分析: 分散分析(4学年×4専攻)の結果, 学年の要因に有意性が認められた($F(3, 392)=6.29, P<.001$)が, 専攻の要因, および学年と専攻との交互作用に有意性は認められなかった。学年の要因に有意性が認められたので, 学年間の対比較をしてみると(Tukeyの検定), 4年次は1年および2年次より有意に高いことが認められた($q(4, 392)=5.14, q(4, 392)=5.48$, いずれも $P<.01$)。また4年次は3年次より有意に高い傾向が認められた($q(4, 392)=3.50, .10>P>.05$)。

⑤4年制大, 短大, および専門学校生1, 2年生間の比較: 4年制大学は英文科と食物科の1, 2年生を, 短期大学は英文科と家政科を, 専門学校は1, 2年生を, それぞれ代表とした。以上の5群×学年(2)の分散分析の結果, 群間にも学年間にも有意差は認められなかった。つまり, 1, 2年生の段階では差が認められないことを示している。

⑥4年制大学と専門学校生との比較: 4年制大学は食物専攻の1, 2, 3年生を代表とした。その理由は, 食物専攻生は資格取得(栄養士)の点で専門学校生と類似しているにとらえたからである。群(2)×学年(3)の分散分析の結果, 学年間に有意差が認められた($F(2, 175)=3.92, P<.025$)が, 専攻間に有意差はなく($F(1, 175)<1$), また交互作用も有意でなかった(F

属（大学，学部，学科）としてとらえて，自我同一性の形成過程を明らかにしたい。具体的には，自我同一性対同一性拡散の両極が，①大学1年から4年までどのように発達的に変化していくのか，②4年制大学，短期大学，および専門学校生の間で差を示すのかどうか，そして③学部・学科の専攻分野によって違いが示されるのか，を横断的に質問紙調査法によって検討したい。

なお，本研究で大学生のみを被験者にしたのは，自我同一性の課題が最も問題になってくるのが大体18歳以降の後期青年期である（笠原，1980）からである。また女子学生のみを対象にした理由は，遠藤（1981）の大学2年，3年生を対象にした結果では，男女間の得点に有意差が認められていないことから，女子学生だけでも後期青年期の一般的傾向を知ることができるだろうと考えたからである。

方 法

被験者 福岡女子大学生410名，福岡女学院短期大学生178名，久留米大学医学部附属臨床検査専門学校生123名。その内訳はTable 1に示す通りである。被験者の年齢は18歳～23歳である。

Table 1
被験者の内訳

| 福岡女子大学 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 |
|--------------------|-----|-----|-----|-----|
| 国文科 | 42名 | 45名 | 38名 | 31名 |
| 英文科 | 36 | 33 | 32 | 24 |
| 食物科 | 17 | 23 | 22 | 9 |
| 理 科 | 21 | 17 | 7 | 13 |
| 福岡女学院短期大学 | | | | |
| 英 文 | 48 | 38 | | |
| 家 政 | 42 | 50 | | |
| 久留米大学医学部附属臨床検査専門学校 | | | | |
| | 44 | 45 | 34 | |

測定尺度 測定尺度は次の2つである。(1)自我同一性達成度測定項目（遠藤，1981「アイデンティティの心理学」P. 324-325）。本測定項目は，Erikson著の「Identity and the life cycle」（小此木訳編1973，「自我同一性」）から自我同一性を記述する文章を抽出し，それらのうちで「同一性対同一性拡散」の測定項目として適切な19項目からなっている。各項目に対して5段階尺度で評定さ

精神分析的自我心理学者Erikson (1959) が唱えた自我同一性 (Ego Identity) の理論は、青年期の自我形成を考察するうえで大きな影響をおよぼしてきた。彼は青年期において果さなければならない心理・社会的課題として、自我同一性の確立を提唱している。Eriksonの考え方に立つ小此木 (1975) によれば、真の「自我同一性」が問題になるのは、青年期とりわけ後期青年期 (late adolescence) である。それまでは幼児期から青年期にかけて、各集団の同一性および役割に自己を同一化させる試みがくり返されるが、これらの同一化 (identification) はまだ可逆的で遊戯的、実験的である。ところが後期青年期には、それまでの同一化群を最終的に取捨選択し、秩序づけ、統合する自我同一性の確立が要求される。この自我同一性の確立は、社会的な自己定義であり、おとなとしての自己の確立である。このような自我同一性の確立の障害としてEriksonは「同一性拡散症状群」 (identity diffusion syndrome) を記載したが、これらの同一性統合の病理の研究は、精神病理学に多大の貢献をもたらしている。

また笠原 (1980) は、自我同一性を、①生れてこのかた自分は「一貫した存在」として今日まで生き続けており、さらに今後もその延長上を生きるであろうという自信、と②自分という存在もしくは自分の生き方が、自分の生きているこの「社会によって是認」されているはずだという自信、の2つの軸でとらえ、人間はこの2つの軸があって始めて安定感を持って生きていけると述べている。

この自我同一性という概念は、Eriksonが彼の臨床的経験を通して構築されたものである。そのため、我国においては、自我同一性確立の課題に悩む青年の臨床的事例研究が多く報告されている (小此木, 1972; 西園, 1972; 福島, 1974; 鑑, 1972など)。一方、健常青年を対象に自我同一性の達成度を操作的に質問紙法でとらえようとする研究も報告されてきた (Marcia, 1970; 古沢, 1968; 遠藤ら, 1975, 1977; 砂田, 1979) が、これらの研究は自我同一性の測定尺度の作成に力点がおかれており、自我同一性の発達については検討されていない。

鑑ら (1979) は大学3年生のみを対象に、自我同一性の発達的变化を臨床的観点から考察している。鑑らは質問紙法と臨床的面接法で彼らの自我同一性達成水準を測定し、その形成段階を①モラトリアム期、②選択と喪失に伴う危機期、③自我同一性定着期の3段階をあげている。しかし、鑑らは自我同一性の年齢 (学年) 別変化を実証的には検討していない。

Erikson (1959) は、連続する「時間」と特定の社会的現実である「空間」の枠組みの中で定義される自我の感覚を自我同一性としてとらえている。そこで本研究では、連続する「時間」を学年として、社会的現実である「空間」を所

女子大生における自我同一性の発達

山 口 快 生
長 尾 博¹

Development of ego identity in women's college students

Hareo Yamaguchi
Hiroshi Nagao

1 活水女子大学教授